

連続シンポジウム「分離派建築会誕生 100 年を考える」第 6 回
分離派建築会の造形 建築と彫刻の交差

大正～昭和前期の彫刻家にとっての建築

■ あらすじ

1 はじめに——前史としての明治期

- ・ 建物を飾る彫物 から 建築を装飾する彫刻 へ
- ・ 工部美術学校彫刻学科
- ・ ラグーザとコンドル
- ・ カッペレッティの建築と大熊氏廣の銅像
- ・ 建築家と銅像の台座

2 新海竹太郎とその時代——大正期の彫刻の諸相

- ・ 新海竹太郎の彫刻界での位置と、交友関係
- ・ 新海竹太郎の作品と建築家——伊東忠太、塚本靖ら
- ・ 国民美術協会
- ・ 東京帝国大学建築学科での「彫塑」の授業
- ・ 平和記念東京博覧会

3 齋藤素巖、日名子実三と構造社——離れつつ、近づきたい思い

- ・ 同時代の西洋彫刻の影響——ブールデル、メシュトロヴィッチ
- ・ 東京美術学校彫刻科の動向——朝倉文夫らと官展の彫刻
- ・ 齋藤素巖の経歴——イギリスで学んだ彫刻
- ・ 日名子実三の経歴——社会性とモニュメント、建築
- ・ 関東大震災とその後
- ・ キーワードとしての「建築」——理想としての「建築」と現実の建築

4 その後の時代と、まとめ

- ・ 敗戦後の公共空間へ
- ・ 彫刻家たちのつながりと、建築家たちのつながり
- ・ 彫刻家と建築家の、個々の結びつき
- ・ 彫刻と建築を結びつけたいという思いが生まれるところ
- ・ 彫刻／建築のための建築／彫刻と、彫刻／建築の建築性／彫刻性

■主要な彫刻家と建築家の生没年

【彫刻家】

Vincenzo Ragusa (1841-1927)
小倉惣次郎 (1845-1913)
高村光雲 (1852-1934)
石川光明 (1852-1913)
大熊氏廣 (1856-1934)
長沼守敬 (1857-1942)
白井雨山 (1864-1928)
佐野 昭 (1866-1955)
山崎朝雲 (1867-1954)
新海竹太郎 (1868-1927)
北村四海 (1871-1927)
渡辺長男 (1874-1952)
沼田一雅 (1873-1954)
武石弘三郎 (1877-1963)
荻原守衛 (1879-1910)
建島大夢 (1880-1942)
小倉右一郎 (1881-1962)
朝倉文夫 (1883-1964)
高村光太郎 (1883-1956)
藤川勇造 (1883-1935)
佐藤朝山 (1888-1963) 三越本店《天女像》
齋藤素巖 (1889-1974)
長谷川栄作 (1890-1944) 平和博機械館彫刻
堀 進二 (1890-1978) 新海竹太郎門下
安藤 照 (1892-1945)
中牟田三治郎 (1892-1930) 京都帝大講師
日名子実三 (1893-1945)
金子九平次 (1895-1968) ブールデル門下
清水多嘉示 (1897-1981) ブールデル門下
新海竹蔵 (1897-1968)
松田尚之 (1898-1995) 建彫社
村山知義 (1901-1977)
笠置季男 (1901-1967) 《マーキュリー》
泉二勝麿 (1905-1944) 今井兼次との共作
本郷 新 (1905-1980)
岡本太郎 (1911-1996) 《太陽の塔》

【建築家】

Giovanni Vincenzo Cappelletti (1843-1887)
Josiah Conder (1852-1920)
片山東熊 (1853-1917)
曾根達蔵 (1853-1937) 大熊氏廣の友人
辰野金吾 (1854-1919)
妻木頼黄 (1859-1916) 日本橋
横河民輔 (1864-1945) 帝国劇場、三越本店
伊藤為吉 (1864-1943) 大熊氏廣とつながり
伊東忠太 (1867-1954)
中條精一郎 (1868-1936)
関野 貞 (1868-1935)
塚本 靖 (1869-1937)
武田五一 (1872-1938)
佐藤功一 (1878-1941) 彫刻作品の制作
田辺淳吉 (1879-1926)
佐野利器 (1880-1956) 丸善本社
後藤慶二 (1883-1919) ロダンへの関心
岡田信一郎 (1883-1932) 東京府美術館
内田祥三 (1885-1972) 東京帝国大学の建物群
渡辺 仁 (1887-1973) 《古市公威像》台座
中村 鎮 (1890-1933)
村野藤吾 (1891-1984)
岩元 禄 (1893-1922)
山田 守 (1894-1966)
石本喜久治 (1894-1963)
堀口捨己 (1895-1984)
森田慶一 (1895-1983)
蔵田周忠 (1895-1966)
今井兼次 (1895-1987)
滝沢真弓 (1896-1983)
岸田日出刀 (1899-1966) 大分市遊歩公園
坂倉準三 (1901-1969)
山口文象 (1902-1978)
谷口吉郎 (1904-1979)
前川國男 (1905-1986)
丹下健三 (1913-2005) 大阪万博

■関連年表

1898/ 高村光雲ほか《西郷隆盛像》。台座を塚本靖が設計

1900/ 高村光雲ほか《楠木正成像（楠公像）》。台座を片山東熊が設計

1902/ 留学から帰国した新海竹太郎が東京帝国大学で建築史など聴講

1903/10 カッペッレティ設計の参謀本部前に大熊氏廣《有栖川宮熾仁親王像》除幕

1904/ 新海竹太郎、塚本靖、岡田三郎助、平子鐸嶺、結城素明が新図案会結成

1907/ 第1回文展

1908/ 新海竹太郎《市川紀元二像》（塚本靖台座設計）、《南部利祥像》（伊東忠太台座設計）

1909/ 片山東熊設計の東京帝室博物館表慶館車寄せに大熊氏廣のライオン像設置

1910/ 中村達太郎・佐野利器設計の丸善本社の正面入口に新海竹太郎《手長足長》

1911/02 帝国劇場完成。屋上に沼田一雅によるモルタル製《翁》像設置

1913/03 国民美術協会結成。洋画・日本画・彫塑・建築・装飾美術の各部

1914/ 東京大正博覧会。新海竹太郎が建築装飾顧問。国民美術協会に委託された各館前の装飾彫刻を和田英作の原図をもとに藤井浩祐、石川確治、畑正吉、小倉右一郎、建畠大夢が制作。セセッションのスタイルの正門の装飾を新海や朝倉文夫ら制作

1914-1918 第一次世界大戦

1916/04 後藤慶二「ロダン翁の建築観」『建築』196号（『後藤慶二氏遺稿』）

1917/ ロダン没

1919/06 玉置登臨「ロダンの後—エミル・アントワン・ブルデル—」『研精美術』134号

1919～ 新海竹太郎が東京帝国大学工学部の講師として建築科の学生に塑造を教授

1920/ 分離派建築会結成

1920/11 横河民輔設計「日本工業倶楽部会館」竣成。屋上正面に小倉右一郎による男女一對のセメント像設置

1921～1926 保田龍門、金子九平次、佐藤朝山、清水多嘉示、武井直也が相次いでブルデルに師事

1921/ 岩元禄《旧・京都中央電話局西陣分局（現・N T T西日本西陣ビル）》

1922～ 中牟田三治郎が京都帝国大学工学部建築学科彫塑実習の講師となる

1922/ 平和記念東京博覧会。新海竹太郎が彫刻家の選定と制作の監督。「平和館の両女神」「噴水の母神」「第二会場噴水の小供」（以上、国方林三）、「正門の恵比寿大黒」「第二会場噴水の水鳥」（以上、堀進二）、「噴水柱頭の小供」（浅川伯教、新海竹蔵）

1922/07 朝倉文夫『和様建築及彫刻』書画骨董叢書第11巻（書画骨董叢書刊行会）

1923/01 村山知義、ドイツから帰国。6月にマヴォ結成

1923/06 第3回分離派建築会展に石本喜久治が将来したアーキペンコの「女像瓶」展示

1923/09 関東大震災

1923/ バラック装飾社設立。日名子実三が参加

1923/11 山口文象ら創宇社第1回展

1924/03 齋藤素巖・日名子実三、『読売新聞』に「仮装の銀座と浅草」連載

1924/04 帝都復興創案展。日名子実三《文化炎上碑》《死の塔》。佐藤功一《復興の女神》

1925/ パリで現代装飾美術・産業美術国際博覧会（アール・デコ博）

1925/06 中村鎮編『後藤慶二氏遺稿』刊行

1925/ 日名子実三《蔵魄塔（震災犠牲者合祀塔）》（浄心寺境内）

1926/05 岡田信一郎設計の東京府美術館開館。彫刻室設置

- 1926/06 蔵田周忠『ロダン以後 1900—1926』（中央美術社）
- 1926/09 齋藤素巖と日名子実三が彫刻家団体「構造社」を結成
- 1926/ 大阪朝日会館の壁面装飾を中牟田三治郎が担当
- ****/** 昭和初年、彫刻家松田尚之が武石弘三郎の協力により佐藤功一、塚本靖、伊東忠太、武田五一を顧問に建彫社設立。銀座伊東屋の内部装飾などを手がける
- 1929/ プールデル没**
- 1930/ 蔵田周忠・関根要太郎設計の多摩聖蹟記念館に渡辺長男の《明治天皇騎馬像》
- 1933/ 内田祥三設計による東京帝国大学の図書館壁面に新海竹蔵によるレリーフ、医学部附属病院壁面に新海と日名子実三のレリーフ
- 1933/ 森大造ら関野聖雲門下の木彫家を中心に九元社結成
- 1935/ 村野藤吾設計のそごう大阪本店竣工。外部壁面に藤川勇造ほか《飛躍》
- 1937/ 村野藤吾設計の渡辺翁記念会館竣工。玄関壁面に宮島久七によるレリーフ
- 1937/ 東京帝国大学構内に堀進二《古市公威像》。渡辺仁台座設計
- 1940/10 九元社が蔵田周忠を講師に招き研究座談会開催
- 1940/11 宮崎市に日名子実三《八紘之基柱》竣工
- 1941/ 今井兼次が彫刻家泉二勝麿の協力により《日本航空発始之地碑》
- 1949/09 新制作派協会に建築部新設。第13回展で彫刻と組み合わせた展示
- 1950/10 大分市遊歩公園に朝倉文夫《滝廉太郎君像》。公園設計は岸田日出刀
- 1950/11 井の頭恩賜公園で第1回林間彫刻展。小野田セメントが協力→セメント彫刻流行
- 1951/01 営団地下鉄の銀座駅出入口に、笠置季男《マーキュリー》設置

■主要参考文献

- ・塚本靖「建築装飾と建築家の職分」『美術新報』1巻19号（1902年12月22日）
- ・新海竹太郎「彫刻の進歩」『読売新聞』1911年10月15日
- ・岡田信一郎「故小松殿下御銅像の台座」『建築工芸叢誌』3冊（1912年5月）
- ・岡田信一郎「分離派建築会の展覧会を觀て」『建築雑誌』34編406号（1920年9月）
- ・堀口生（捨己）「アルヒペンコ」『建築世界』18巻1号（1924年1月）
- ・村山知義「芸術の究局としての建築」『国民美術』1巻7号（1924年7月）
- ・齋藤素巖「彫刻の実際化」『文芸時報 美術版』81号（1928年9月6日）
- ・今井兼次「航空碑を設計して」『セメント工芸』33号（1942年6月）
- ・「第四回研究座談会」『九元』4号（3巻1号）（1941年1月）
- ・長谷川堯『神殿か獄舎か』（相模書房、1972年、再刊・鹿島出版会、2007年）
- ・新海竹蔵撰、新島保雄編集責任『新海竹太郎傳』（新海堯・新海竹介、1981年）
- ・松田尚之「〈対談〉こしかたの人々」『日展史9 帝展編四』（日展、1983年）
- ・田中修二『近代日本最初の彫刻家』（吉川弘文館、1994年）
- ・田中修二『彫刻家・新海竹太郎論』（東北出版企画、2002年）
- ・浜崎礼二・前村文博編『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち展』展覧会図録（キュレーターズ、2005年）
- ・田中修二編『近代日本彫刻集成』全3巻（国書刊行会、2010-13年）
- ・木下直之「台座考——建築家と記念碑」『銅像時代 もうひとつの日本彫刻史』（岩波書店、2014年）
- ・田中修二『近代日本彫刻史』（国書刊行会、2018年）